【資料２】

第５回総合計画審議会書面会議 意見集約資料
2020 年 7 月 10 日作成
総務部政策推進課

【須坂市第六次総合計画・前期基本計画 基本構想案について】

１．将来像について

（１）将来像の表現案について

●最終案１「豊かな環境で共創により活力あふれるまち」４票
●最終案２「豊かな環境で共創により「しあわせ」を感じるまち」11 票
※委員 16 名の個別意見は「（２）表現の選択理由」に記載のとおり。
※11 票のうち５名からは両案を組み合わせた代案の提案あり。
※遠藤守信委員からは２つの案を組み合わせた案が望ましいとの提案あり。

（２）表現案の選択理由

①最終案１の選択理由

●「活力」（があることが）基本と考える。（春原委員）

●当初は「しあわせを感じるまち」がいいと思っていました。しかし、今年は思ってもいなかったコロナウイルスの問題や７月の大雨災害などがあり、願いをこめて「活力あふれるまち」になってほしいと選びました。イメージとしては、「しあわせを感じるまち」は個人に対して、「活力あふれるまち」は個人も含めて地域・社会全体の将来像だと受け取りました。須坂市全体を考えると「活力あふれるまち」がいいと思いました。また、送付資料 P12 では共創により「活力」が生み出されるとあるので、活力を重視したいと思いました。（高橋委員）

●「しあわせ」もいいと思いますが、やはり「活力」ある力強さが良いと思う。（竹前委員）

●「須坂みらいチャレンジ 2030」の資料の全体、特に「計画の位置づけ」、「2030 年への展望…変化のシナリオ」、「チャレンジ指針」、「基本目標（分野別総合政策）」の内容から、「活力あふれるまち」を目指して行くという意図の方がより強く読み取れます。また、「しあわせ」は人によって捉え方や感じ方が異なり、短中期的に変化しやすいものであるため、中長期計画のスローガンとしては「活力」のほうがふさわしいと考えます。（寺田委員）

②最終案２の選択理由

●「しあわせ」は誰しもが希求する状態であり、環境や活力は「しあわせ」の前提条件と捉えることが自然と考える。須坂市の資源である「すこやかさ」、「ほんもの」、「つながり」

を更にブラッシュアップさせ、市民一人ひとりの「しあわせ」を実現させていくことが将来像を語るうえで相応しいと考えます。（高野委員）

●将来像について、感じ方は違えども、「しあわせ」と個々に感じることがあるべき姿、ありたい姿だと考えます。最終的に「しあわせ」と感じることで活力が生まれるものだと思います。（川口委員）

●「しあわせ」の価値観はそれぞれ個人の感性によるもので、多様性があり、その実現にそれぞれの立場で努力する姿が須坂市の将来像と思います。数字とか物欲での「しあわせ」もありますが、精神面での「しあわせ」も必要と思います。（西原委員）

●（最終案１のように）「活力あふれるまち」とすると、それに乗り切れない方々が少なからずの割合でおられると考えられます。といいますのも、「活力」を出せない、それを出す意欲が出せない、などの状況が想定されます。したがって、「活力あふれるまち」は市民の多くの方々を包み込む概念ではないと判断申し上げます。
一方、「「しあわせ」を感じるまち」は、市民の多くの方々を包み込む概念であると判断申し上げます。たとえ、「活力あふれるまち」ではなくても、「「しあわせ」を感じるまち」であるならば、それはすこぶる良い状況が共創されていると判断できると考えます。
（土本委員）

●将来像に込めた想いに全く同感です。「しあわせ」は老若男女全ての人が夢や希望を持ち、日々の生活や生業を健康で送ることができ、叶ったときの達成感だと思います。人それぞれに夢や希望は異なるので、「しあわせ」の感度やイメージが異なるのは当然ですが、モチベーションは多少違っても目指す将来像としては、誰しもがそうありたいと等しく思えるところであり、やさしく理解でき、将来像として適切であると思います。（最終案１の表現について）、何がどうなって「活力」なのか、イメージ図（送付資料 P12）を見ても、まして将来像として文言だけの表現では「活力」は難しい言葉だと思います。（活力は）第五次総合計画の基本目標でも使われている言葉であり、第六次総合計画が第五次総合計画の焼き直しと見られかねない。（永井委員）

●須坂市には素晴らしい自然があり、「ほっと」するふるさとがあると実感して生活してきました。恵まれている豊かな自然を 10 年後まで伝えることは大切な事だと思っています。また、それぞれの立場で共創しながら築いていける社会をめざすことにより、「個人」の「しあわせ」を築き上げられたらよいと思う。最終的には誰もが「しあわせ」を感じて、住んでよかった！と思えるネーミングが心に響いてくる。（永田委員）
●「活力あふれるまち」と比べ、分かり易い。（本藤委員）

●消去法にて，案２よりは適切と感じました。（遠藤守委員）

●「活力あふれるまち」の表現について、「活力」があっても市民が「しあわせ」を感じないようなまちでは市のイメージがよくない。「活力あふれるまち」というハードな表現よりも「しあわせを感じるまち」というソフトな表現のほうが将来像として須坂市のイメージに合っている。（神林委員）

●新型コロナウイルス発生のため、世の中のシステムや生き方が変化していく現況においては活力あふれる姿は考えられません。この環境が「しあわせ」だなあと感じるところに人々の心が良き方向に向かうと信じています。（山上委員）

●「しあわせ」と括弧書きで強調していてインパクトがあると思う。（二タ村委員）

（３）その他（言葉の言い回し等、自由意見）

●須坂市は製糸業等から端を発した製造業がまちを牽引してきた歴史があり、小さいながらも常に活力に溢れた（溢れていた）まちとのイメージが強い。また近年では果物王国や蔵のまちとしての知名度アップも著しく、こうした資源を活用した活性化策も進展している。さらに、予定されているインター周辺開発事業も須坂を大きく変える活力になりうる事業である。以上から最終案２に「活力」を加え、以下の表現案を提案させていただきます。
豊かで活力ある環境を共創し「しあわせ」を感じるまち（高野委員）

●二つの案を合わせ、以下表現案でも良いのではないかと考えました。
活力あふれ「しあわせ」を感じるまち（川口委員）

●最終案２に「安心」を加えたらいかがでしょうか。万一の場合には温かい支援を受けることができるという「安心」があることは、誰一人取り残さないという SDGs の基本理念にも呼応するのではないかと思うのですが。その重要性については遠藤会長のおっしゃる通り市の責務です。（永井委員）

●両案の最初に出てくる「豊かな環境で」について、この「で」が指す内容は「既に備わっている」環境と資料中で明示されており説得力もあるのですが、将来像のスローガンとして、「須坂市は豊かな環境が備わっているのだ」と発信することに対しては、もう少し控え目な表現が良いのではないかと感じた次第です。（遠藤守委員）

●最終案１と最終案２の要素を組み合わせた案として以下はどうか。
両案の冒頭にくる“豊かな環境で”は、既に須坂市に備わっている状況でもあり、将来像としては、やや説明的で回りくどい印象が否めない。将来像としては不要ではないか。これまで審議会で検討してきた内容に加え、コロナ禍において社会の状況も変容している。そ

のような中においても、豊かな自然環境に恵まれていることや、若者・高齢者が適度に共存し、やさしく、そしてあたたかな、いわば無形資産である豊かな環境で安心した暮らしができることは他に代えがたいものである。「活力」は共創により生み出されるものであるが、それは市民が無形（見えない）資産である「豊かさ」と「しあわせ」を相互認識し、さらに切磋琢磨と協力による「共創」でその価値をより高い次元に引き上げていくことがまさに須坂市の将来像ではないか。また、将来像としてはやはり“このまちでそれを実現していく”という市民の共通スローガンであり、意識付けであることから表現の最後にあえて「須坂」とつけるその意義は大きい。
「豊かさ」と「しあわせ」を感じる共創のまち　須坂（遠藤守信委員）

●（「豊かな環境」について）環境というキーワードが大まかで漠然としていないか。具体的には自然・文化・歴史などでは。また、「共創」という言葉が難しい。以下のような例はどうか。
豊かな自然と文化と歴史に育まれた人々が「しあわせ」を感じさせるまち（本藤委員）

●最終案１のハード面と最終案２のソフト面を取り入れ、以下を代替案として提案したい。
豊かな環境で共創により活力があり「しあわせ」を感じるまち（神林委員）

●新型コロナウイルスが今後どうなっていくのか、いろいろな面で考え直していかなければならない時代を迎え、みんなで検討していく時代だと感じています。（山上委員）

２．その他

（１）2030 年への展望やシナリオ（送付資料 P7～P8）について

●2020 年～2030 年での地域社会は大きく変わると思います。IT・5G の普及により人々の生活スタイルと行動が大きく変化すると考えられます。情報通信のインフラ整備とそれぞれの改革が必要になります。外国人の受け入れ等、考慮すべき課題がたくさんあります。SDGs、新型コロナ、災害と共存する社会になるでしょう。（西原委員）

●以下の点を踏まえて、展望とシナリオの記載が必要と思います。
・気候温暖化をはじめとする環境問題は市の農業のリンゴやぶどう栽培に大きな影響を及ぼすことが想定される。また、防災は住民の関心事でもある。
・ 団塊の世代が後期高齢者になる 2025 問題は、医療・介護・社会保障・支え合い等、今のままでは立ち行かなくなる。（永井委員）

●新型コロナウイルス感染で生活様式がすでに大きく変わりつつあることを踏まえたシ

ナリオを考えないといけないと思っています。（永田委員）

●（送付資料 P7）「SDGs が掲げられ、世界が一丸となって 2030 年までに取り組むことが求められている」とあるが、最近のニュースによると 2030 年を目指しているが、コロナウイルスの問題で達成が困難との報道がありました。市としてより積極的に取り組んでいかないと達成は難しいと思いました。（高橋委員）

●4 項目目「一方で～」について、
・「第 4 次産業革命」は，ドイツの Industry4.0 のことですが，我が日本政府はこれを参考に Society5.0 を提唱しています。ここで敢えて旧来の用語・海外の事例を用いる意味はあまりないように思います．なお，Society5.0 では経済発展のみだけでなく社会的課題の解決を両立する，いわば官民一体の取り組みが重要であるとされています。したがって自治体による主体的な推進が必須ですので，起こりうる変化やチャンスと捉えるよりは，市が積極的に推進しなければならない課題として取り上げるべき項目のように思います。
（遠藤守委員）

●〈これまで〉の欄に、若者と高齢者の共存、両者の交流が豊かであることを加えてはどうか。年寄りがいる安心、子供がいる地域の朗らかさは須坂市の良き部分である。
●〈2030 年までに起こりうる変化とチャンス〉には SDGs が触れられているが、あくまで SDGs は目標であり、目的である ESG については触れられていない。企業も株主至上主義から公益資本主義へとシフトしなければならない社会。企業が ESG に貢献し、活躍することは新たなビジネスチャンスであり、そのような企業活動は新たな原動力を生み出し、地域の活力や発展に資するものである。SDGs の視点と併せ、ESG の視点をぜひ盛り込んで構成願いたい。こうした視点を市民で共有することも「共創」を進める上で不可欠である。
●〈2030 年までに起こりうる変化とチャンス〉の 2 項目目、新型コロナウイルスの影響が触れられているが、新たな価値観や生活感の中で、無形資産を多く持つ「須坂」での生活が移住希望者も含め、住む人にとって新たな価値を提供しうるチャンスがひそんでいることをぜひ記載してほしい。
●女性や高齢者の活躍が注目される中、須坂市にはそれらの活躍の場やチャンスが多く備わっていることも記載願いたい。
●教育についても触れられているが、やはり充実した教育をさらに地域全体で高め、守り、市民が関わり続けることは大切。未来を担う子どもたちにとっても、市民が自分達に関心をもってくれていること、まち全体で応援されていることは励みであり、地域愛を形成する上でも大切。そんな視点を盛り込んでいくとなお良い。
（以上、遠藤守信委員）

（２）まちづくりの基本的な視点（送付資料 P11～P12）について

●旧市街地は健康を中心に、車を必要としない生活圏の構築が必要と思います。郊外は最新技術を取り入れた地域と車を基本とした近代的な生活圏が理想です。（西原委員）

●まちづくりの基本指針が「チャレンジ」であるが、チャレンジ感が弱いように感じます。（永井委員）

●チャレンジ指針２の「進化」で，述べられている、IoT、ビッグデータ、AI、ロボットのキーワードを代表的に用いているのは、「Society5.0」であり、「第 4 次産業革命」ではありません．もし「Society5.0」に変更されるのであれば、先にも述べたように行政側も積極的な施策を打つ必要があるため、「進化に柔軟に対応」ではなく、「積極的に推進します」ということになろうかと思います。「第４次産業革命」のままで行く場合は、以後の４つのキーワードについては表現を改める必要があろうかと思います.
2 点目、（補足説明もありますが）送付資料 P12 の図で示されている内容が稀薄ですので、もっと情報を盛り込む必要があろうかと思います。（遠藤守委員）

●まちづくりの基本方針として、今後人口が減少することは前提におきながら、人口は減っても社会的総力は落とさない、地域の活力は劣化させない、そんな地域を皆で共創していく。それを促すのがチャレンジ指針３でいう「学びと行動」である。このコンセプトを盛り込んで構成願いたい。
●「（２）これからの地域経営と共創のまちづくり」欄に「３者が切磋琢磨して…」とあるが、市民団体も含めた４者である。４者連携モデルとし、他のページと齟齬がないように記載されたい。また、「３者が切磋琢磨して…」を「３者が切磋琢磨、協力して…」のほうが表現としてふさわしい。
●送付資料 P12 の概念図は表現が古い。中心にくる重なり合う部分が何なのかが分かりづらい印象がある。図としてうまく表現できるかは検討だが、平面の重なり合いではない四重らせんモデルを用いて「行政・一般市民・民間企業・民間団体（活動団体）」の４者がスクラムを組んで、強固な須坂市を形成していくイメージで図式化してほしい。
（以上、遠藤守信委員）

（３）基本目標（送付資料 P16～P17）について

●基本目標６に「企業誘致」も加えたらいかがでしょうか。（高野委員）

●子育て・教育分野の遅れが目立ちます。少なくとも小中学校の生徒にパソコンを無償支給し、オンライン教育での日本一を目指すくらいの意欲が必要です。小学校１年生は 10 年後に高校１年生になります。人材育成こそが将来の須坂の姿だと思います。（西原委員）

●基本目標１
SDGs の取組みを目指す→”取り組むこと”が目標？
基本目標２
「選ばれるまち」の前に子どもが伸びのび育つことが先ではないか。他者の評価を目的にしているようにとれる。
基本目標３
「市民主導の健康づくり活動により先進モデルを確立し健康寿命を延ばします」としてはどうか。案で示されている「100 年時代を豊かで…」は漠然とし過ぎる。「豊か」に代わる適切な文言を。高齢者対策での目標が必要ではないかと思います。（以上、永井委員）

●よく書けていると思います。（遠藤守委員）

●基本目標２については「子どもの個性と力がのびのび育つまち」に「教育」を入れ、あえて「子どもの個性と力がのびのび育つ教育のまち」としてはどうか。
●基本目標４については「一人ひとりが学び、高め合うまち」に「共創」を入れ、あえて「一人ひとりが学び、高め合う共創のまち」としてはどうか。
（以上、遠藤守信委員）

（４）その他
●（今後、基本計画を策定する上で）第五次総合計画のように達成度合いが評価できる記載方法（各施策における「めざしていきます！」欄）は第六次総合計画でも継続してください。（永井委員）

●新型コロナウイルスとは今後共存の時代となります。「with コロナ」、「新しい生活様式」、「新しい働き方」が主流になる。これらについて盛り込むべきではないか。
●50 年に一度、100 年に一度と思われる災害が、毎年そして年に何回も発生している。自然災害に対する危機意識を市民一人ひとりが高めることが大切。
●危機意識とは自分で考え、自分で判断し、自分で行動する力である。
（以上、春原委員）

●コロナウイルスの問題で、（社会全般について）今まで通りの活動ができない状況です。こういった感染症の問題に加えて、水害や地震などに強いまちづくりはとても大事だと思います。こうしたことへの対応としてインターネット環境の整備なども重要だと思います。今後、社会活動を継続するにあたり今までとは違った部分も考えていく必要があると思いました。（高橋委員）

●送付資料 P1「計画の位置付け」において、人生 100 年時代の前提や with コロナやアフ

ターコロナの世界観（困難な疾病や災害は常にやってくることを当然とした社会の在り様）の中で柔軟に対応できる計画としていくことをしっかり盛り込んでいただきたい。
●送付資料 P2「少子高齢化の状況」グラフについて、高齢化率が 30%を超えたことが悲観的に示されているが、都会ではこの比率はもっと深刻。須坂市はむしろ、経験豊かな高齢者と若者が共存している良いまちだという側面でとらえることもできよう。他市比較なども十分に示し、須坂市が良いまちだと市民に認識してもらう見せ方も工夫願いたい。
●送付資料 P4「社会動態」のグラフについて、学校をはじめとする教育環境の充実や自然へのあこがれなど、須坂市の無形資産に魅力を感じた若者世代の転入の成果ではないか。市民が自分達ではもはや気付くことのできなくなっている「かくれた資産」、「見えない資産」を再認識するため、もっと魅力をアピールするような見せ方が必要。
●送付資料 P5「財政状況」のグラフについて、これだけ見るとただ暗い将来を予想させるものとなってしまう。このような状況ゆえ、人材（財）を豊かにして産業の充実と維持発展を目指すことが大切。将来への展望まで含めた見せ方が望ましい。
●送付資料 P6「市民意識指標」について、須坂市が住みやすいと感じる市民の割合がかなり高いと見ている。他の市民指標も効果的に挿入し、総合計画を見た市民が自分の地域を「もっと豊かに」、「もっと楽しく」、そんな地域にしたいと思える見せ方を工夫願いたい。
●送付資料 P9 本文で「行政・市民・民間企業・関係団体が一丸となって…」とあるが、これは重要。ただ、送付資料 P12 のイメージと齟齬があるので検討すること。基本的には４者連携モデルが望ましい。
●送付資料 P9 のイメージ図については、現在の須坂市の姿と将来像を対比させ、2030 年からのバックキャスティングを図イメージできるような図とすることが望ましい。
●送付資料 P10「将来像に込めた願い」について、孤独（孤立）にさせないということに加え、「やさしい」「あたたかな」まちとすることを想いとして加えてはどうか。コロナ禍で人の関係性は希薄になりがち。しかもそれが社会の新動態であり社会の流れとして避けられない将来となるだろう。人恋しさは誰にもある。心でつながり、心で支え合う、そんな温かさが須坂市の目指す姿でもある。
●送付資料 P10 の本文で「市民・民間企業・関係団体の…」とあるが、P9 や P12 と齟齬無いよう、「行政」を加え、表現を統一すること。４者連携モデルとする。
●送付資料 P13 の SDGs の記述に ESG の概念と内容を盛り込むこと。
●次期総合戦略は総合計画に統合とのことだが、国の４つの柱にこだわる必要はない。市の方針や他施策とのバランスもあるかもしれないが、特色ある教育分野を一本の柱として別出し（追加）し、地域全体で子どもの育成に関わる市の意思表示としてはどうか。
（以上、遠藤守信委員）